

<2016年5月 月例会報告>

\*\*\*\*\*

# サッカー、ドイツ、通訳

山内 直 (浦和レッズ)

\*\*\*\*\*

【日 時】2016年5月16日(月) 19:10~21:30 (その後「景宜軒」~23:40頃)

【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室 (東京都文京区大塚 1-9-1)

【テーマ】サッカー、ドイツ、通訳

【演 者】山内 直 (浦和レッズ)

【参加者 (会員) 11名】

安藤裕一 (GMSS ヒューマンラボ)、梅本嗣 (博報堂)、奥崎覚 (Qoly)、奥山純一 (フットリンク)、春日大樹 (筑波大学大学院)、小池靖 (サッカースポーツ少年団・さいたま市)、田中理恵 (会社員)、徳田仁 ((株)セリエ)、中塚義実 (筑波大学附属高校)、山内直 (浦和レッズ)、吉原尊男

【参加者 (未会員) 7名】

釜崎太 (明治大学)、済木崇 (ブラインドサッカー・サムライ兵庫)、長尾樹 (アスレティックトレーナー)、長尾栄伸、早川絵美 (サッカーファン)、笛木寛 (立教大学)、山中亜希子 (フリーランスライター)

注) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません (ご本人の了解が得られた範囲で公開しています)

【報告書作成者】春日大樹 (筑波大学大学院)

【目次】

第1部 ドイツと浦和レッズ

1. ドイツ留学.....	3
2. 日本帰国 -レッズとの出会い.....	3
3. オジェック監督招へいの舞台裏.....	3
4. 2002年ワールドカップ.....	5
5. セレッソとバイエルン.....	5
6. リエゾンという仕事.....	6
7. 再びレッズへ.....	7

第2部 カッコいいサポーターを育てよう！

1. カッコいいサポーターを育てる意義.....	8
2. 私を支えてくれた仲間達① - バイエルンファンクラブ - .....	8
3. 私を支えてくれた仲間達② - 語学学校の仲間 - .....	9
4. 私を支えてくれた仲間達③ - SVヘッヘンドルフ - .....	9
5. ノーサイドの精神① - 98年ワールドカップ - .....	9
6. ノーサイドの精神② - ブーイング - .....	10
7. ノーサイドの精神③ - 07年アジアチャンピオンズリーグ - .....	10
8. ノーサイドの精神④ - 浦和レッズのサポーター - .....	10

第3部 スポーツにまつわる話をしよう

➤ 98年ワールドカップ (中塚) .....	12
➤ 12年ロンドン五輪 日本対韓国 (春日) .....	12
➤ グットルーザー ハンドボール日本リーグ (安藤) .....	13
➤ 高校選手権神奈川県予選 (長尾樹) .....	13
➤ 日本と海外のゴール裏の違い (徳田) .....	13
➤ サポーターの集団幻想 (梅本) .....	14
➤ 日立台のゴール裏 (田中) .....	14
➤ FC東京のブーイング (早川) .....	15
➤ ジェフの熊本の震災への支援 (山中) .....	15
➤ Jリーグサポーターによるコミュニティー形成 (長尾栄) .....	16
➤ ヘイトとコミュニケーション (奥山) .....	16
➤ サポーターの世代格差 (奥崎) .....	17
➤ 人権問題の解決にむけて (吉原) .....	17
➤ ACLの意義 (小池) .....	18
➤ 「サッカーを文化に」の意味 (笛木) .....	19
➤ サッカーとナチズム (釜崎) .....	19
➤ 会場でのゴミ拾い (済木) .....	19

## 第1部 ドイツと浦和レッズ

### 1. ドイツ留学

(サッカー指導者に) なんか方法はないかと考えたところ、イングランドやドイツなどそっちの方にはあるようだと、調べるとやっぱりドイツだとなりドイツへ行くことにした。

私は1962年新潟県新発田市に生まれ、戸川小、本丸中を経て新発田高校を卒業した。名前からも分かるように新発田市は城下町である。1982年に高校卒業後、サッカー指導者を目指して、単身ドイツへ留学する。当時はJリーグもなく、サッカー指導者はプレー経験のある元選手ばかりであった。また、新発田市内の7つの中学校のうち、1つしかサッカー部のある中学校がないなどの環境であった。このような環境下で、何とか指導者になる方法はないかと考え、ドイツへ渡る事を決めた。ヨーロッパ入りしてすぐは、ザルツブルクの大学のドイツ語講座に通い、その後ミュンヘンのそばにあるムルナウの語学学校へ移る。1986年にMCメイツという三菱商事の子会社に在籍し、東ドイツのボルフェンのコニカのフィルム工場で1年間通訳を務める。1987年にデュッセルドルフにある日独共同事業研究所に勤務し、貿易と展示会ブースの業務を担当した。特に、三井三池がルール工業地帯で使っている掘削の道具を購入するという仕事に関わる。この仕事を通じて、人生で初めて炭坑に潜り、キリハと呼ばれる最先端の採掘現場に行くという経験もした。炭坑に潜る前、酸素吸引機の使い方を学んだが、最後に「これを使う時は終わりだよ」と言われたことは印象に残っている。その他には、三菱自動車の展示会の仕事も旭通信社から要請を受けて行ったりもした。

### 2. 日本帰国 - レッズとの出会い -

Jリーグというのが出来る、準備室を作るから広告代理店手伝え!となった(中略)浦和レッズの立ち上げの方も手伝わせていただいた。

1990年、日本へ帰国する事となった。その際、旭通信社から声をかけられ、旭通信社の子会社であるサンアーティストスタジオへ入社し、すぐに旭通信社へ出向する事となる。旭通信社入社後も、メインは三菱自動車を担当していたが、日本の事を勉強する意味で様々な仕事にもチャレンジした。その中で、フォルクスワーゲンアウディ日本社からの仕事の依頼を、ドイツ語が出来るという理由で任された。しかし、豊橋での業務はすべて日本語であった。その後、東京へ戻り、引き続き三菱自動車の仕事を担当した。丁度その頃、Jリーグ創設に向けて、準備室を立ち上げた時期だった。そして、私もJリーグの立ち上げ、そして浦和レッズの立ち上げに関わるようになった。1993年にJリーグができた当初、浦和レッズはとても弱かった。しかし、そのレッズの初勝利を挙げた相手はヴェルディだった。この勝利に、街中はヨーロッパの街の様にクラクションを鳴らした車が走っていた事を覚えている。

### 3. オジェック監督招へいの舞台裏

彼が唯一私に要求したことは、それは通訳というのは監督の口だ(中略)その結果、私は選手たちに相当恨まれました(笑)。

私が浦和へ関わりだした当時、浦和はあまりにも弱かった。アルゼンチン籍の優秀な選手はいたが、上手く使いこなせていなかった。そこでまず、ゼップ・マイヤーという往年の西ドイツ代表の名 GK を GK コーチとして招へいし、私は彼の通訳を任された。その後、ウーベラーン、そしてミヒャエル・ルンメニゲが浦和へやってくるなど、ドイツへとシフトしていった。

初代監督の森監督は成績不振を理由に辞任、その後をうけたのは横山謙三さんだった。賛否両論あったが、横山監督はとにかくサッカーは世相を映しているという考え方を持っていて、商業サッカーを嫌っていた。なかなか結果が出なかった。そんな頃の夏、私とセニョールという愛称で呼ばれていた佐藤が当時の清水社長に呼ばれた。当時のレッズには佐藤が二人いて、イギリス好きの方を「ミスター」、ブラジル好きでポルトガル語が堪能な方を「セニョール」と呼んでいた。そこで社長から、「人選は任せるからドイツへ行ってとにかく良い監督を探せ」と言われた。私はそこで、当時チームに在籍していたドイツ人選手達、ギド・ブッフバルト、ウーベバイン、ミヒャエル・ルンメニゲ、ウーベラーンからどんな監督がふさわしいかの情報を集めた。そして、当時カールスルーエで監督をしていたビンフリード・シェーファーに白羽の矢が立った。しかし、彼とコンタクトを取る為の彼の電話番号が分からなかったため、ギドの代理人に頼んで、彼の電話番号を入手し、ドイツに渡ったのち彼へ電話をかけた。電話で彼は、カールスルーエで日本人と会ったことが周囲に知れてしまうと、大変なことになってしまうので、こちらへは来ないで欲しいと言い、マンハイム駅のレストランで彼と話をすることになった。彼も浦和での仕事に興味を持っていたようだったが、事前に会長と話し合った結果はノーであった。そこで彼に、彼と同じような考え方、フィロソフィーを持っている監督を紹介してもらった。その監督とは、のちに浦和を率いることになるフィンケ、そしてオジェックだった。フィンケは残念ながら、その翌日に契約を更新してしまったため、コンタクトは取れなかったが、オジェックは当時率いていたトルコのフェネルバフチェで成績不振のため解任される可能性があった。そこで、彼とコンタクトを取り、フランクフルトで話をした。最終的には、社長の清水さんがドイツに来て面談して契約を結ぶ事となった。このあたりの話は山岡純一著の「マリオネット」の中にも詳しく書かれている。

オジェックとは別に、もう一人フィテッセで監督をしていた人がいた。彼も若手を育てることに定評はあったが、監督就任への条件が厳しすぎた。彼は、住む場所を東京に用意し、加えて職場のある浦和にももう一軒家を用意して欲しいなどの事を求めてきた。それに対して、オジェックは職場が浦和なら浦和に住むし、部屋の選択もこちらに任せるという事であったため、我々としても条件が一致した。契約を結ぶ段階になって、通訳を誰に任せるとかという問題が生じた。そこでオジェックから、「契約にも関わったのだからお前がやれ」という事を言われ、彼の要望で私が通訳に決まった。彼が通訳を務める私に唯一要求したことは、通訳とは監督の口であるという事だった。つまり、監督が怒りながら話している時は、ヘラヘラと話してはいけない、監督と同じように怒って話さなければならぬという事だった。私もこれが通訳の基本だと思っていたし、オジェックも同じ事を要求したという事だった。先に話した東ドイツ時代のサイトマネージャーも、東ドイツの対応が良くない日は机を叩いて怒って出ていくから、同じように机を叩いて出てきてくれと要求され、私も同じようにやった。しかしこの様にした結果、現在レッズで GK コーチを務める土田に相当恨まれてしまった(笑)。オジェックが彼には理解できないドイツ語を話しながら、怖い顔して怒っている隣で、私は彼が理解できる日本語で話し、同じように怖い顔して怒っている様子にすごく彼はむかついていたようだった。

#### 4. 2002年ワールドカップに向けて

これは素晴らしいと思ったことは、1998年のフランスワールドカップのキャンプ地での出来事です。世界中のメディアがきているんですね、記者会見に。その時彼（ドイツサッカー協会広報、ニースバッハ）は、ひとりひとりの名前を呼んで指名した。

先の経緯で、私はオジェックの通訳を2年間勤めた。彼の功績もあり、レッズは3位になったシーズンもあった。弱かった時代にJ2がなかったことは、本当にレッズにとって幸いであった。97年のオジェックからケッペルに代わるタイミングで私はフロントに入り、ジェネラルマネージャーの補佐を務める事となった。現場から離れる寂しさもあったが、98年フランスワールドカップ、そして2002年の日韓ワールドカップに向けてやるべき事も沢山あった。その中で、私はキャンプ地に興味を持っていた。そんな頃、当時デンマーク代表を率いていたオジェックのアシスタントコーチを務めていたフリントから連絡をもらい、デンマークのキャンプ地を訪ね、事務総長と面会する事が出来た。また、オジェックからドイツサッカー協会へ繋いでもらい、ドイツのキャンプ地を訪ねることも出来た。そこで素晴らしいと思った事は、当時の広報担当で、最近までドイツサッカー協会会長だったニースバッハの記者会見での振る舞いだった。ワールドカップ中のドイツの記者会見のため、世界中のメディアが出席していた。その記者会見の場で、彼はひとりひとりを指名して対応していた。何十社とあるドイツ国内の記者の名前を必ず呼ぶようにし、海外の記者に対してはどこの国から来たか全て覚えて声をかけていた。私はいまだかつて、ここまでの記者会見は見た事がない。その他にも、日本戦3試合はなかなかチケットを手に入れる事が難しかったが、現地でも何とか全試合観る事が出来た。

#### 5. セレッソとバイエルン

FCバイエルン・ミュンヘンの実質的な経営者であり精神的な支柱であるウリ・ヘーネスの実家はソーセージ屋なんですね。そのソーセージ屋、工場に日本ハムさんが社員を送っていた、という偶然って世の中にあるんですね。

98年ワールドカップ後、私はレッズから旭通信社へと戻った。しかし、戻ってすぐに日本ハム（セレッソ大阪）からオファーがあり、大阪へ転勤になった。セレッソが私に興味を持った理由は、セレッソがバイエルン・ミュンヘンと繋がって、バイエルンのやり方を学ぼうとなっていたからだ。当時セレッソはヤンマーを母体に色々な事に取り組んでいたが、上手くいっていなかった。日本ハムも野球球団は持っていたが、サッカークラブの経営とは異なっていたため、参考にならないなどの背景があった。バイエルンのフロントで力のあったウリ・ヘーネスの実家がソーセージ屋を営んでおり、そのソーセージ工場へ日本ハムが社員を派遣していたという偶然の「ハム繋がり」から、セレッソとバイエルンが繋がる事となった。この繋がりから、ヘーネスが大阪へやってきて、話をしてくれる事となり、私が通訳を務める事となった。そして、セレッソをこれからバイエルンの様にするため、当時の営業部長の藤井さん、強化部長の大西さんと共にミュンヘンへ渡り、1カ月間バイエルンの営業、強化、総務などの話を聞き、出来るものを取り入れようとなった。その際、ヘーネスが言っていたことは、絶対にバイエルンのコピーをしてはいけないという事だった。彼の考えは、コピーでは絶対に上手くいかないの、自分達に合った形でカスタマイズをすべきであるというものだった。約1カ月間、バイエルンの練習場のそばにあるペンションに滞在し、毎日歩いて練習場に向かう日々の中で多くの事を学ぶ事が出来た。そのひとつとして、幼稚園児にサッカーを教えるというものがあつた。バ

イエレンではこれを無料で実施していたが、セレッソは大阪人の気質を考え、有料で行う事とした。  
(大阪人は無料で実施すると、一生懸命練習をしないと考えた。) 他には、バイエルンがよく行っていたバスツアーを参考に、セレッソも関東での試合にはバスツアーを実施した。バイエルンではバスツアーのアテンドやグッズの販売員などに元選手を活用する事が多かった。例えばスタジアムのグッズ販売員は、90年ワールドカップ代表だったハンス・プリューグラーが担当していた。また、バスツアーのファン対応は、90年ワールドカップ代表でサードキーパーを務めたアウマンが担当していた。

彼がキーパーコーチを目指さなかった理由は、試合中にゴール裏のファンから一番声援を送ってもらった人間として、ファンへ恩返しをしたいという思いがあったためであると、彼は話していた。彼はアウェイのツアーには必ず帯同し、彼の役割をセキュリティ担当とも呼んだ。彼は自分の電話番号を配り、ファンは彼と話す事を楽しんでいたり、自分の意見をフロントに届ける事が出来ると考えていた。セレッソもこのやり方を真似し、元選手の梶野さんがその役割を果たしていた。加えて、このやり方は札幌にファイターズがうつった時にも取り入れられていた。北海道では現在、サポーターズクラブの後援会を作り、チームの理念を実現してくれるサポーターズクラブのイベントなどに選手を派遣したりしている。サポーターズクラブが例えば介護施設の訪問などを企画し、それに選手が来てくれないかと打診し、選手達はしっかりその催し物に参加する。バイエルンでは、役員が東ドイツへ出向き、子供達へユニフォームをプレゼントしたというエピソードがあるが、これは同様の事例である。サポーターがクラブにとってよいものを企画し、費用はクラブが持つという方法で、ファンを拡大して行った。

## 6. リエゾンという仕事

**ワールドカップで代表チームに付くことはすごくいい経験になった。**

先のセレッソの仕事が軌道にのったため、再び旭通信社に戻り、旭通信社の仕事に専念した。当時は大阪にオリンピックを誘致するためにまず、東アジア大会を企画した。この仕事が旭通信社へと振られ、私はその内のサッカー領域を担当する事になった。この大会にはA代表ではなくユニバーシアード代表が出場しており、平川、堀之内、坪井など、のちにレッズへやって来る選手達がプレーしていました。東アジア大会が6月に終わり、7月からコンフェデレーションズカップが日本で開幕したタイミングで、突然新潟でキャンプをしていたカナダ代表チームから現地入りするよう要請があった。なぜなら、カナダ代表の監督を務めていたのは、オジェックだったからだ。彼らのキャンプ地が新潟であったこともあり、会社に許可を取ってカナダ代表のリエゾンになることになった。このカナダ代表は練習試合、当時J2で反町監督が率いるアルビレックス新潟にぼろ負けしたにも関わらず、本戦のブラジルとの試合ではいい試合をするという面白いチームであった。コンフェデ終了後、旭通信社でコココーラのワールドカップのフラッグベアラーの企画運営を担当していたところ、またも組織委員から連絡があり、ワールドカップのドイツ代表のリエゾンが見つからないので引き受けて欲しいとの要請を受けた。しかし、今回は会社からの許可がなかなかおらず、ドイツ代表の宮崎キャンプが決まったぎりぎりのタイミングでようやくリエゾンになる事が決まった。ワールドカップで代表チームに付くことはすごくいい経験になった。忘れられない出来事のひとつは、試合を行う事となっていた札幌、鹿島、静岡での宿舎の確保だった。その内、札幌で宿舎を確保する際、あるドイツ人がオ

一ナーを務めるあるホテルを使おうと考えた。そこはレッズも使用しており、良いホテルである事は分かっていた。しかし、申し込み手続きが上手くいかず、結果としてサウジアラビア代表に取られてしまった。ホテルのファックスには送信記録が残っていたにも関わらず、手続きが上手くいかなかった。それ以来、私はファックスを信用せず、送った後には必ず電話で届いたか確認するようになった(笑)。他には、宮崎のキャンプ中の練習での出来事だ。ドイツ代表は非常に厳重で練習を絶対にみせなかった。グラウンドの周りに柵をつくり、近くのグラウンドが覗ける小高い丘には警備員まで配置した。そんな状況下で練習を続けていたある日、練習場に向かう途中、車いすに乗った女性がドイツ国旗を振っているところをドイツ代表の団長が見つけた。団長はバスを止め、彼女に声をかけた。その女性と子供は練習見学に行きたいと言っていると団長に伝えると、団長は彼女らを練習場内に招き入れ、練習を全て見学させた。更に練習後には、選手全員と握手をしたり、お土産を渡したりしていた。選手のうち、最初に子供のもとへ歩み寄ったのはヤンカーという選手だった。彼はスキンヘッドに2メートル近い大柄の選手であったが、にこにこ笑顔で子供の元へ歩み寄り、「元気？」と声をかけ、子供が大喜びしていた事を覚えている。私はこんな良い事があるのだな、と思った。イタリア代表などのリエゾンが宿舎にも入れない事があると聞いた。また、印象的だったことは食事の時の出来事だった。リエゾンである私は、団長や監督のいるテーブルで食事をとった。彼らはこの食事の場で、明日の大切な事が決まるので同席するように求めた。実際に翌日の集合時間など、色々な情報をもたらして仕事を行っていた。その後レッズでも、とにかくチームのマネージャーは必ず監督やフロントの重役、強化部長と一緒に食事を取るようにさせた。

## 7. 再びレッズへ

丁度連絡した時にですね、彼(ギド・ブッフバルト)は休暇中で、オーストリアにいました。今何してるの、と聞くとリフトの上って行ってましたね(笑)

ワールドカップ後、三度旭通信社に戻って仕事をしていましたが、浦和レッズの森孝慈さんからレッズへ来ないかと誘われた。この誘いを妻に黙って二つ返事で承し、2003年からレッズに勤める事となった。この年、オフト監督のもと初めてナビスコカップを優勝したが、オフトは辞めてしまった。そこで、犬飼さんから、ギドと連絡を取って欲しいと言われた。丁度連絡をした時、彼はバカンスでオーストリアにいたため、その点は考慮し、その場で具体的な話はせずオファーを伝え、その後日本に来てもらい監督就任という流れになった。ギドのもと、2004年はセカンドステージ優勝、ナビスコカップ準優勝、天皇杯3位、2005年はリーグ2位(新潟との最終戦で16分間だけ1位の時間もあつた)、天皇杯優勝、2006年は、ナビスコカップは振るわなかったが、リーグと天皇杯は優勝するなどの好成績を収めた。そして2006年に、ギドの子供が受験のため、どうしても1年はドイツへ帰らないといけないという事で、契約満了をもって退団となった。後任としてオジェックが再びやってきて、クラブとして初めてのACL優勝とリーグ2位を果たす。ガンバ大阪もACLは優勝しているが、レッズのようにACL優勝とリーグの両方で好成績というのは、まだどのクラブもなしえていない事だ。あの当時の強力なメンバーが揃ってはいたが、如何にACLとリーグの両立が難しい事か分かる。

(第1部終了)

## 第2部 カッコいいサポーターを育てよう！

### 1. カッコいいサポーターを育てる意義

日本サッカーを文化として、根付かせるためにはサポーターというものが絶対に必要。選手がいくら強くなっても文化にはならない。

カッコいいサポーターを育てようと思った理由は、日本にサッカーを文化として根付かせる為には、サポーターというものが絶対に必要であると感じたからだ。選手がいくら強くなっても文化になることないと思う。言い換えると、多くの人がサッカーを好きになって、サッカーが日本一のスポーツにならないと文化にはならないという事だ。93年にJリーグが出来るまで、日本には応援団は存在していたが、サポーターは存在していなかった。応援団は典型的な3-3-7拍子に始まるもので声を合わせて行うものだが、サポーターはそう言ったものではなかった。しかし、現在のJリーグのサポーターはコールリーダーがいなくて何もできなくなっている。応援団の様な形が嫌で始まったサポーターが、段々もとに戻ってしまっている。つまり、日本のサポーターはまだ成熟していない。成熟しているサポーターとは、ゴール裏で一体となって応援しているヨーロッパのクラブのサポーターの様な人達の事だ。現在、多くの日本人がヨーロッパのサッカーを観に行っているが、その良さを日本へ上手く伝えられていないように感じる。そこで、サッカーの素晴らしさを周りの人達に伝え、試合を観に行く事につなげていけたらと思っている。勿論、こういった活動は一人でやっても仕方がない事であるので、このサロン2002という場を生かして、この場でサッカーの素晴らしさを共有し、試合を観に行くことにつなげていければと思っている。

### 2. 私を支えてくれた仲間達① - バイエレンファンクラブ -

やっぱり使わないと言葉って覚えられない、彼がいたんで本当にドイツ語を覚えましたし・・・  
ただし、バイエルン州のすごい方言でしたけどね(笑)

レッドイーグルスというバイエルンのファンクラブに入った。写真は、そこで一緒だったユルゲン、彼は私と同じムルナウという街に住んでいた。ムルナウから80キロ離れたミュンヘンまで、電車で1時間ほどかかった。彼とはたまたま試合会場で知り合い、同じ街に住んでいるなら、試合を一緒に観に行こうとなったことが始まりだった。その後、彼の友人を紹介してもらい、ファンクラブに入るという流れになった。アウェイゲームと一緒に観に行く事もあった。当時はまだドイツ語もままならなかったが、彼らはゆっくりと私に分かるまで何度も繰り返し話してくれたし、私の話をゆっくりと聞き、理解してくれた。この様にして段々とドイツ語を覚えていった。やはり、言葉は使わないと覚えられないという事を体感しました。彼がいたおかげでドイツ語を覚えました。ただ、彼はバイエルン州の方言を話すため、私はドイツ語とバイエルン語の両方を話す事が出来るようになった。バイエルン語が出来た事で、ベッケンバウアーが三菱自動車の招待で日本に来た時に彼の通訳を担当する事になった。もともとお願いしていた通訳がバイエルン語を分からなかったため、急ぎょ私が担当する事となった。憧れのベッケンバウアーの通訳が出来たことは最高の思い出だ。



### 3. 私を支えてくれた仲間達② - 語学学校の仲間 -

これだけの人達が、あのボールが1個あれば仲間になれるんですね。

現地の語学学校の友人達とサッカーをした。一緒にサッカーをしたのは、アルジェリア、トルコ、フランス、メキシコ、フランス系スイス人、イラン人、そして日本人の私だった。この様々な国出身の人達とも、ボールが1個あれば仲間になる事が出来る。サッカーはまさしく共通語であった。当時はみんなドイツ語が殆ど出来ず、母語も異なっていたが、ボール1個で試合が出来、仲間になった。他にも、イタリア系やフィンランド系の女の子ともサッカーの話で盛り上がった。サッカーがあれば、世界中どこへ行っても何らかの共通の話題になり、共通語となって話が出来た。

### 4. 私を支えてくれた仲間達③ - SV ヘッヘンドルフ -

身分保証人、ヘッヘンドルフですね・・・サッカーやっててよかったなと思いました。

SV ヘッヘンドルフは、私がドイツにいた頃在籍していたチームだ。ヘッヘンドルフは人口400人の小さな村で、人口よりも牛の方が多かった。(ドルフはドイツ語で村を意味する。) そのチームで旧ユーゴスラビアのザグレブで開催された大会に参加した。当時の写真には、ザグレブの民族衣装とバイエルンの民族衣装を身に付けたそれぞれの選手が映っている。この様に、現地のクラブを通じてドイツにいながら海外と交流を持つ事が出来た。

そして、このクラブが私に与えてくれたものは、私のビザだ。当時のビザには、1984年まで滞在を許可するという記述と合わせて、身元保証先がSV ヘッヘンドルフとなっている。滞在理由は、サッカー指導者の研修のためとし、田舎町のアマチュアサッカークラブが3年間私の受け入れ先となってくれた。当時は政権が社会民主党からキリスト教民主連合に代わり、締め付けが厳しくなった頃だった。そのため、以前は可能であったドイツ国内でのビザ取得が出来なくなり、何人もの日本人が帰国してビザを取り直さなければならないという事態になっていた。

### 5. ノーサイドの精神① - 98年ワールドカップ -

(ノーサイドとは) イングランドで発生したチームスポーツの原点であり、試合が終われば、サイドはないという考え方なんです。

昨年のラグビーワールドカップで良くに耳にした「ノーサイド」という言葉ですが、これはラグビー用語ではない。イングランドで発生したチームスポーツの原点であり、試合が終わればサイドはないという考え方だ。これを踏まえた上で、中塚理事長がJFAニュースに投稿されていた「試合後はノーサイド」のエピソードを紹介する。

98年ワールドカップ、オランダ対メキシコ戦をパブリックビューイングにて観戦した。試合後にサポーター同士のユニフォーム交換が行われていた。また、緑のメキシコサポーターとオレンジのオランダサポーターが一緒になって喜んでいて、試合後にやり合ってしまったもおかしくないところだった。これがサポーターであると感じた。

(中塚)

試合結果は引き分けで両チームとも2次ラウンド進出を果たしていた。

(徳田)

勝ち負けが付かなかったから、両チームとも和気あいあいとしていたのでは？(笑)

#### 6. ノーサイドの精神② - ブーイング -

日本人はどうも他のところ、見かけだけ知ってしまって、なんでもかんでもブーイングしている。

私がJリーグを観ていて残念に感じることはブーイングのあり方だ。レッズ対新潟のゲームで、新潟に所属していた田中達也選手に対して、レッズサポーターはブーイングをしていた。レッズのJリーグ優勝に貢献してくれていた田中選手に対してこれはありえない事だと思った。イタリア、セリエAでも聞いた話だが、自分のクラブに貢献してくれた選手をブーイングで迎えるのはありえないという事がヨーロッパでは通例であるようだ。日本のサポーターは見かけだけを真似して、何でもかんでもブーイングしてしまっている。同じ新潟戦をギドと観ていた時も、レッズサポーターは横パスやバックパスに拍手を送っていた。彼も、こんなパスに拍手を送るなんてありえないだろうと驚いていた。加えて、相手のバックパスにはブーイングをしている。自分のGKへのパスに拍手し、相手のGKへのバックパスにブーイングをしている。ブーイングが単純なワンパターン化してしまっており、点を取るというスポーツであるサッカーの良いプレーが分かっていない。折角Jリーグができ、日本のサポーター文化が育っていると思っていたが、実は後退してしまっているのではないかという危機感を抱いた。

#### 7. ノーサイドの精神③ - 07年アジアチャンピオンズリーグ -

本当に、こういうものを目の前で見ているんですが、感じていないと見れないんですね。

続いて、大住良之さんの「サッカーの話をしよう」から紹介する。2007年11月14日、浦和レッズはACLを制し、アジアチャンピオンになった。会場では大盛り上がるのサポーターが星のマークのコレオグラフィーを作っており、その写真を撮り、現像した時に次の光景を見つけた。レッズを祝福する紙吹雪が舞う中、準優勝に終わったセパハンの選手達がレッズの選手達へ拍手を送っていた。まさしく、試合が終わったら相手の健闘を讃えるという素晴らしいプレーだった。目の前でこのようなプレーを観ているはずだが、スポーツの素晴らしさを感じないと見る事が出来ない。このようなプレーには注目してみていき、この様なチームには拍手を送りたい。1974年西ドイツワールドカップ決勝で、オランダが負けた時もクライフはロイヤルボックスの前で西ドイツ代表の選手へ握手を求めている。

#### 8. ノーサイドの精神④ - 浦和レッズのサポーター -

いい事をやっている人って当たり前だと思っている事が多いので、周りの人が教えていかないと伝わっていかないなという思いもあります。

一昨年に埼玉スタジアムでジャパニーズオンリーという差別的なスローガンが掲げられ、レッズが無観客試合を行わなければならないという事件が起きた。この事件の後、「みんなで差別をなくそう」という目的で署名運動が行われ、私はその署名を集めるブースの担当となった。しかし、ただ単に署

名を集めるだけの活動の目的が分からないと同時に、単純にこの活動がつまらないと感じた。署名を集める活動ではなく、サッカーの良さを伝え、サッカーが好きなサポーターは差別をしない事が当たり前となる方が良い。実際に過去、クレイジーコールズというゴール裏で一番元気だったサポーター団体は、ゴール裏にいた外国人に「おにいちゃん、一緒に応援しよう」と声をかけて自分達のところへ集めていた。しかし、20年が経ち、そういったサポーターがいなくなってしまった。こういった人達の集まりが、浦和レッズのサポーターだという事を伝えていかなければならなくなった。

当時のコールリーダーのひとりの話を紹介する。当時、ヴェルディ川崎にレッズは6-0でぼろ負けした試合があった。試合の後、サポーターが怒ってグラウンドへ物を投げ込んだ。それを見たコールリーダーが彼へ「物をそっち（グラウンド）へ投げるな。ピッチを汚すな、そんな事をするなら俺達ゴール裏に投げろ」と言った。これがレッズのサポーターだった。他にも、花火や爆竹をスタンドでしていたしあいがあった。これを見たサポーター達がミーティングを開き、「俺達はフリーガンではない。選手にもルールがあるように、サポーターにもルールがある。だから俺達はそれを守っていこうと話していた」と話していた。ミーティングの中心にいたのは吉沢康一という青年だった。彼に話を聞くと、そんなことは当たり前だと話していた。彼は、自分が年を取ってスタジアムへ来られなくなった時には、自分達を見ていた高校生や中学生がゴール裏のリーダーになっていくのだから、自分達が彼らへサポーターとは何か教えないといけない、と話していた。良い事をしている人はそれを当たり前だと思っているので、気が付いた周りの人が伝えていかないといけないと思う。

(第2部終了)

### 第3部 スポーツにまつわる話をしよう！

僕らの好きなサッカーってこんなにいいモノなんだな、って僕らの中で見ておきたい、そう  
いった目で見えていくとまた一味違ったものになるんじゃないかなと。

#### 98年ワールドカップ（中塚）

98年ワールドカップは私にとって初めて現地で観戦するワールドカップだった。面白いエピソードは多々あるが、中でもサンテティエンヌの公園で観戦したオランダ対メキシコの試合は印象深いものだった。チケットは現地調達だったため、会場でチケットが安くなるまで待っていたが、最後まで3000フランという非常に高額であったため、スタジアムでの観戦は諦めた。そこで街中のパブリックビューイングがすごいという噂を聞き付け、そちらへ向かった。会場に着くと、オランダ人の大男達が試合前からがぶがぶとビールを飲み、大騒ぎをしていた。そのオランダ人の間に、小さなメキシコ人がいた。試合が始まると、みんな試合を観る事に集中し始めた。始めはオランダが先制し、2-0となる。その後メキシコが1点を返し、2-1として試合は終盤に差し掛かった。もしも、メキシコが同点にできれば、メキシコも二次ラウンドへ進出できるため、会場のメキシコ人達は大騒ぎをしていた。試合終了間際、メキシコが同点ゴールを決めたかに思われたが、オフサイドの判定でノーゴールとなる。それをワイン片手に観ていたメキシコ人の青年は怒って、隣のオランダ人と喧嘩しそうになっていた。最終的には、後半アディショナルタイムにメキシコの同点ゴールが決まり、両チームとも2次ラウンド進出となった。不思議だったことは、メキシコの音楽が会場に流れ、それに合わせて会場全体が歌え踊れの大騒ぎとなった事だ。サンテティエンヌの街ですでに準備されていたのかもしれない。

JFA ニュースに掲載していた連載は、当時規律フェアプレー委員を務めていた時に書いたものだ。以前に筑波大学で監督を務められていた松本光弘さんから、この様なサッカーにまつわるいい話をまとめて、フェアプレーの推進へつなげようとしており、こういった話を掲載する事となった。

#### 12年ロンドン五輪 日本対韓国（春日）

2012年春から1年間、ドイツのボンへ留学をしていた。レッズ繋がりのお話として、当時ボーフムへ田坂選手が移籍してきたばかりの頃の話がある。田坂選手に会うため、ボーフムの練習場を訪ねたが、残念ながら田坂選手はメディカルチェックのため、練習には参加していなかったが、当時のボーフムのスタッフから「コンニチハ」と声をかけられた。彼はフィンケ監督時代にレッズのスタッフとして働いていた事があるという事で、練習後に二人で盛り上がった事を覚えている。

ノーサイドの精神にまつわる私の思い出は、当時開催されていたロンドン五輪の話だ。当時、ドイツ語の語学クラスに参加していた私には、韓国出身の友人が多くいた。その内の一人とは、同じアマチュアチームに入り、一緒にプレーもしていたので、非常に仲も良かった。そんな彼を含む韓国人の友人達と、準決勝のブラジル対韓国を観戦した。試合はブラジルの勝利に終わり、彼らは非常に落胆していた。前の試合でメキシコに敗れ、日本は同じく三位決定戦を戦う事が決まっていたので、私は彼らに「三位決定戦と一緒に観よう」と提案した。その提案に、チームメイトでもある彼は「一緒に観るのは辞めた方がいい。お前の事は好きだけど、試合中に俺はお前を殴りかねない」と言っていた。周りの友達の様子からも、それが冗談ではないと感じ取った私は試合と一緒に観ることを断念した。

三位決定戦では韓国が勝利し、三位入賞となったが、試合後の話題は、韓国人のある選手が竹島に関するスローガンを掲げた事だった。日本全体がそれに対して、韓国はフェアプレー精神に反しているとのバッシングを始め、私の周りの友人達も韓国へのバッシングを始めた。そんな中、彼から私にメールが届いた。彼は、「試合はいい試合だったが、試合後にあぁいった事になって残念だ。しかし、俺とお前の関係にあの出来事は全く関係のない事だ。それどころか、こういった話をお前とできる事で、俺達の関係はより深いものになっていくと思う。」と私に伝えてくれた。私はこのメールが本当にうれしかった。殴ると言った時の彼の眼と、試合後の彼の対応のギャップに本当に驚いた。これが私の留学中の忘れられない思い出だ。

### グッドルーザー ハンドボール日本リーグ (安藤)

グッドルーザーはサッカーに限って存在するわけではない。最後まであきらめないで、一所懸命戦うということはどのスポーツでも大切であり、観客もそれを期待している。私の印象に残っている試合はハンドボール日本リーグでのある試合だ。その試合は残り1分ですでに10点以上差がつき、勝敗は決まっていた。サッカーに例えるとこの試合のスコアは0-5ぐらいになる。そして終了間際に負けているチームがペナルティースローを獲得する。ある選手へ、ベンチの監督から「お前が打て」と指示が出た。すでに勝敗が決定した中での最後のワンプレーとなる一投を全力で立ち向かうのは難しい。しかし「スポーツマンのこころ」を理解していたこの選手は、真剣なまなざしでボールを握り、シュートを決めるといったシーンがあった。観客も点差を忘れてその一瞬のシューターとGKの対決を注目した。こういったシーンに、観客はやはり感動すると思う。サッカー以外のスポーツでも、またプロに限らず、いかなるカテゴリーやレベルのプレーヤーでも、全力を尽くすというプレーを通して観客を感動させることはできるのではないかと思っている。

### 高校選手権神奈川県予選 (長尾樹)

私は育成年代である高校サッカーや大学サッカーに関わらせてもらってきている。その経験の中からひとつを紹介したい。高校サッカーでは、公式戦がトーナメントである為必ず決着がつく訳であるが、試合後に選手やマネージャーが負けた相手に「頑張ってくれ」という様子がみられる。少し前までは、周りのチームがやっているからやるといった風潮があったように思う。しかし、私の関わった神奈川県のあるチームは違っていた。そのチームは確か、県予選のベスト4で負けてしまった。試合終了間際、私の担当したチームのキャプテンが頭部を出血してしまい、彼は私の治療を受けている間に試合終了を迎えてしまった。試合終了後に他の選手達がサポーターへの挨拶をすませた後、治療を終えた彼と2人で遅れて挨拶に行った。その時反対側の相手チームからも「良く頑張ってくれた。ありがとう。」という声をかけられた。その光景をみていて、私の中にこみあげて来るものがあり泣きそうになってしまった。実際には、高校生がいる手前泣くことはなかったが、この精神はすごいなと思った。

### 日本と海外のゴール裏の違い (徳田)

私はアメリカのスポーツが好きでよく観る。ヨーロッパでは、スタンドに地域性や民族性が入り込み、すごい盛り上がりエネルギーを感じる事ができる。対してアメリカでは、スタンドで色の違うユニフォームを着ている人がちりじりに観ていても問題にならな。勿論MLS(メジャーリーグサ

サッカー)も、現在観客数が増えているが、スタンドの状況は同じである。サポーター同士と一緒に観ていても喧嘩になることはない。アメリカの法律も少し関係しているのかもしれないが、混ざって試合を観ることはなんら不思議なことではない。Jリーグでは、ゴール裏は自由席になっている。サポーターの中にはエネルギーの強い人と弱い人がいると思うが、指定席にしてしまうと、前に座ったエネルギーの弱い人が、サポーターの親分の様なエネルギーの強い人に追い出されしまう問題が起きてしまうのではないか。日本代表の試合も、以前は指定席であったが、現在は自由席になっている。私はこの点に違和感がある。海外では代表の試合も指定席になっていて、アウェイ席を除くスタジアム全体で応援している。日本のゴール裏はある一定の人達が支配しているみたいで、どこか変である。海外の様にならないかなと思う。

### サポーターの集団幻想 (梅本)

皆さんの話を聞きながら、私はジレンマを感じていた。いい話があると言うことはその半面も存在しているという事である。サッカーの優劣性は、ことさらサッカーファンが言うべきではないというアンチテーゼが私の中には存在している。あらゆるスポーツの中で、同様の事が起きていて、色々な意味で経済的に虐げられる可能性もあるサッカーファンですらそうである、という部分が素晴らしいという方へと持っていかなければならない。

私は横浜フリューゲルスファンである。フリューゲルスファンの中では有名は対マリノス戦で10円玉事件と言うものがある。DFの大竹がマリノスファンから10円玉をぶつけられたというものであるが、私はその現場をゴール裏から見ていた。その時のマリノスサポーターの反応は「何をそのくらいの事で騒いでいるの？」というものだった。対して、フリューゲルスサポーターの反応は「なんひどい事をするんだ！」というものだった。マリノスサポーターが荒っぽいという事ではなく、2つのクラブで文化が違うという事です。フリューゲルスの再建活動を行った時にも感じた事として、サポーターが集まると集団幻想が働いてビラ配りなどをするが、一人で町内会を回るということは出来ないということが挙げられる。ヨーロッパでは個人としてクラブを愛する理由が各々あり、その違いをサポーター同士が楽しむという寛容性がある。日本は急速にJリーグが出来あがったため、クラブを愛する個人の理由がなく、結果としてここでブーイングすべきという流儀を持たず、集団幻想に陥る。この様な状況が、20年、30年と経ち当たり前になっている事が心配である。ヘイトスピーチと同じ原理である。集団主義が日本の文化形成の天敵ではないかと考える。

### 日立台のゴール裏 (田中)

私はスタジアムへ写真を撮りに行っていたので、どちらかのチームを最優先にするという事のないようにしていた。つまり、どちらかのチームを応援するというわけではなかった。そのため、ゴール裏で撮る事もあれば、指定席で撮る事もあった。私が好きだったのは、日立台のアウェイ側のゴール裏であった。私の家から一番近いスタジアムで、特にアウェイのチームが遠方でスタンドが埋まっていない時を観に行っていた。サポーターが来ないと、広角レンズで試合が撮れるので良い。そして、日立台のアウェイ側はいい具合に柏市民とアウェイ側のサポーターがごちゃ混ぜになり、独特の雰囲気になる。その中で、サンフレッチェとの試合を観に行った。丁度、渋谷幕張高校からサンフレッチェに闘莉王選手が加入したばかりで、渋谷幕張高校の現役の女子高生が彼を観に来ていた。始めはアウェイ側のゴールを闘莉王が守っていたので、彼女達も「闘莉王先輩！」とずっと叫んでいた。

彼女達は闘莉王選手以外の事が全く分からない様子でずっと叫んでいたが、周りは寛大にそれを許していた。しかし、後半になると闘莉王選手は反対側に行ってしまった。すると彼女達は久保竜彦選手すら分からないので、叫ぶ事がなくなってしまった。そして、周りにいた柏市民と仲良くなっていた。この様なゆるさがいいなと思った。数年前位にグランパスサポーターの乱闘事件が起こり、日立台のゴール裏が分けられてしまい、先ほどの様なゆるさがなくなってしまった。白でも黒でもないごちゃごちゃとしたゆるさが味わえる意味で、私は日立台が好きだった。

(山内)

日立台は、昔とゴール裏のホームとアウェイの位置が入れ替わりました。以前はメインから見て右側がアウェイ側だった。

### FC東京のブーイング (早川)

先ほどのブーイングの話を受けて、コールが下世話であると有名なFC東京サポーターから説明させていただきます。まず相手のGKへのブーイングは、以前ブーイングをした事でGKがミスした事があることがきっかけで、相手のGKに対する悪意という物ではない。もしも、ミスしてくれたらうちのチームの味方という事で、「あいつうちに来たいんじゃないのか」と話しながら観ている。また、先ほど話に出ていた田中達也選手のような場合、FC東京で元選手にブーイングをすることはその選手への最大の賛辞である。彼が活躍して欲しくないという思いでブーイングする。ブーイングすらされない元選手もいる。そんな中、ブーイングは「活躍しないで欲しい」「よそのチームへ行きやがって」という愛情の裏返しであり、少なくとも私の周りを始めとするゴール裏の大半は愛情を込めたブーイングをしている。試合中に審判へブーイングしている人には、憎しみが込められているが、私は「ブーイングで審判の心証を悪くしてどうするんだ」と思っているので絶対にしない。

レッズのサポーターがどういった気持ちで田中達也選手にブーイングをしているのかは分からないが、私達にとってブーイングは試合を楽しむひとつのコンテンツである。J2元年、当時まだテレビ放送が全くなかった時は、コールも放送禁止用語万歳で、PKになったら両チームのサポーターがゴール裏に集まってしまうなどの無法地帯だったが、不思議と喧嘩は起こらなかった。勿論どちらのチームのサポーターも人数が少なかつた事もありますが(笑)他には、かなりの放送禁止用語を叫んでいるサポーターがスタジアムアナウンサーに怒られるという事件もあった。文字に起こすとひどい事を言っているが、叫んでいる人はそれを楽しんでいるところもあるかもしれない。

(奥山)

ブーイングで示す愛情って選手に届いているのか。

(早川)

相手のチームの選手なので、届かなくてもいいかと(笑)川口能活選手には届いています。以前に川口選手に向かって「ハムカツ」とコールしていたら、彼が段々それに慣れてきて、コールするとゴール裏に手をあげてこたえてくれる。ブーイングをした選手へも試合後には必ずコールをかけるし、その選手が挨拶に来てくれたら拍手で迎えるようにしている。

(奥山)

完結していれば、すごくいい話ですね。表現の仕方はすごいです(笑)

### ジェフの熊本の震災への支援 (山中)

早川さんや山内さんも言うように、チームによってサポーターのカラーがかなり違っている。ジェフのサポーターはのんびりしていて、ユーモアはあまりなく真面目な人が多い。知っている方も多いかもしれませんが、先日のロアッソ熊本戦で巻選手が千葉へやってきた。千葉から移籍した選手には拍手を送られる事が多いが、その中でも巻選手はジェフにとって特別な存在である。その巻選手が熊本の震災の支援を中心になって行っている事、またジェフにも藤島選手という熊本出身の選手がいる事から、サポーターから巻選手を通じて熊本へ支援物資を送った。試合後も熊本の選手が感謝の気持ちを表す意味で場内を一周してくれたりした。こちらから熊本に送ったエールに熊本のサポーターが返してくれたりした。東日本大震災の後もこういった事はあったと思うが、サッカーを通じて支援を行う事ができると思った。ヒートアップするのは試合中だけである。J2は特にサポーターが少ないので、同じJリーグを応援しているという事で繋がった人もいる。

### Jリーグサポーターによるコミュニティ形成 (長尾栄)

私の応援している FC 岐阜というチームはJリーグに上がってまだ8年という歴史の浅いクラブだ。クラブのエンブレムには2002年創設となっている。もともと岐阜県にはサッカーをはじめとするスポーツクラブがなく、スポーツ選手と言えば競輪選手かドラゴンズの選手になってしまう。そのため、以前は野球が一番メジャーなスポーツであったが、プロサッカークラブができた事で、昔サッカーをしていた人と若いサッカーが好きな子達が一緒に応援し、新しいコミュニティができていく。例えば私の実家がある地域では、本来若い人が入るべき消防団や水豪団に、若い人が地域にいないので結果として50歳や60歳の方がかりだされてしまっている。このような田舎のコミュニティが少子化や若者不足で小さくなっている事に反比例して、サッカークラブを応援する繋がりが岐阜でできている。これは、他の地方クラブのある地域ではおそらく同じであると思う。11年ほど前のサッカー批評で取り上げられていた事として、阪神淡路大震災後の復興が早かったのは地域にサッカークラブがあったところだったという調査がある。ユースのクラブの横のつながりを生かして、復興が早まったとする説をある大阪の大学の教授が唱えていた。岐阜にもそういった繋がりができてきている。まだ横の顔をうかがっているところもあり、積極的に活動が出来ている訳ではないが、今回の震災時などではサポーターにも出来る事がないかとクラブと話し合いを持つ事も出来るようになってきた。こういったコミュニティが新たにできてきている事は良い事だと思う。

### ヘイトとコミュニケーション (奥山)

以前、トットナム対フルハムの試合を縁あった地元の方の解説付きで観るといふ貴重な体験をした。その方はトットナムのファンであった。そのトットナムファン達は試合中にフルハムのくそ野郎という歌を歌っていた。そして少し時間を開けて、次はフルハムファン達がトットナムのくそ野郎という歌を歌っていた。衝撃的だった事はこの後の出来事である。場内アナウンスでアーセナルのくそ野郎という歌を歌いましょうという案内が入ると、会場にいる観客全員で仲良くその歌を歌い出した。外国人である私にとって、この光景は全く理解できないものであった。トットナムファンの彼によると、トットナムファンにとってアーセナルは絶対的な悪であり敵であるという事であった。そして、フルハムファンも同じような感覚を持っているため、この様に一緒に歌を歌う事が出来るという事だった。先ほどの話を聞いていて、ブーイングなど行為がコミュニケーションの一環なのか、あるいははっきりとヘイトスピーチとしてのものなのか、どちらであるかが重要であると思った。行為としてはブー



イングであっても、それがコミュニケーションのひとつとして上手く回ってればよいと思う。先の経験は、私にとって楽しい思い出であった。

また、話を聞いていてひとつ疑問に思った事は、質が下がっているのはサポーターだけであるかと言う事です。例えば、いつの間にか子供がボールを蹴っていい公園がなくなっているという事です。上手く説明できているか分からないが、サッカーだけではなくもう一步広く考えてもいいのではないかと。

(山内)

私の聞いた話として、私達が子供の頃は骨を折るという事は滅多にある事ではなかったが、現在の子供達は上手く走れず、走ると骨を折ってしまうというありえない事があるようだ。

(奥山)

中塚さんとフットサルをやった時にも、蹴り方のすごく危ない子がいましたね。

(中塚)

その子、腕の骨を折っていたもんね(笑)

(奥山)

その事はまさかの僕なんですけど・・・(笑)続きは延長戦でお話しします。

(梅本)

その他にも、統計的にスポーツの出来る子と出来ない子の二極化が大きくなっている。

(山内)

大きな課題といったところですね。

### サポーターの世代格差 (奥崎)

私が2000年代半ばから、サポーターの世代間の格差が生じているように感じている。Jリーグが出来る前を知っている方、Jリーグが出来た頃から応援している方、あるいは鹿島と磐田が強かった時を知っている方、そして現在の10代、Jリーグが当たり前にある方では手本にしてきたサポーターが違ふ。例えばJリーグが出来た頃の方の手本となるサポーターは海外のクラブのサポーターだった。しかし、海外のクラブのサポーターは100年も前から応援するクラブがあり、クラブができた頃の事は全く知らないながら、その100年間の中で育てられてきた文化の中で生きている。しかし、Jリーグはまだできて20年である。サポーターがそれぞれ色々な考えを持っている中で、成熟している途中である。私はサッカーのメディアを運営しているが、サッカーの世代格差を感じている。特に10代の子供達には、サッカーはファッション感覚である。試合は観ないが、アーセナルが好きで勝ってくれればうれしい。あるいは、自身がアーセナルファンだからトットナムが大嫌いである。このような感覚で彼らはサッカーを観ている。最近の若いサッカーファンにはそういった部分が感じられる。

### 人権問題の解決にむけて (吉原)

レッズのサポーターには、サッカーを良く分かっている人も多くいる半面、時折ユーモア感からかけ離れてしまっている人もいる。ジャパニーズオンリーについても、やった人はここまで大きな問題になるとは認識していなかったのではないかと。また、リーグでもバナナ事件が起きたりしている。他にも、横浜と川崎の試合で、横浜サポーターが川崎の選手へ問題行動があったりした。

レッズ対横浜の試合を観るため、横浜へ行った時、スタジアムで人権研修会を行っていた。私は内容が気になったため、参加してみることにした。会場には、青いユニフォームをきた横浜のサポーター

一ばかりであった。研修の形式は、座学ではなく職場などで行うようなグループディスカッション形式で行われた。ひとグループ4人ほどでひとつのテーブルに座り、様々なケーススタディーを行った。例題をひとつ紹介する。外国人のXさんが外国人入店御断りの温泉にやってきた。そこで番頭のAさんに「外国人のお客様はお断りです」と入店を拒否された。その話をきいた日本へ帰化したYさんも同じ温泉を訪れた。番頭のAさんからは同じように入店を拒否されたので、Yさんは自身のパスポートをみせた。しかしAさんからは「見た目が外国人なので」という理由で入店を拒否された。この状況で、入店を拒否した側と拒否された側に分かれて議論した。もちろんこういった議論には答えはなく、結論は出ない。同じ場で、ジャパニーズオンリーやバナナ事件が起こらないようにするためには、相手を理解する事などが必要であると考え、この様なことは誰が教えるべきであるかという議論になった。その場では、クラブ、サポータークラブ、スポーツ少年団、家庭など様々な意見が出た。この議論も答えは出なかったが、私自身とても勉強になった。また、その時思った事は横浜の嘉悦社長の意向でこういった事が行われているとしたら、横浜の社長は大したものだなと言う事だった。

私も山内さんと同じく過去のレッズのサポータークラブを知っているため、それと比較すると今は間違った方へ走ってしまう人がいるように感じる。それをなだめる責任はメディアの役割ではないかと思っている。メディアにはそう言った責任があるのではないか。

### ACLの意義（小池）

ジャパニーズオンリーの件について、情報をウェブで集めると、ACLの連戦のアウェイゲームで不愉快な思いをしたサポーターが、ホームの時は自分達の気心の知れた仲間と応援したいという思いからこの様な行動に繋がったのではないかとするものがあった。私も少年団の引率で5月3日のACL浦項戦を観に行くことになった。私が韓国語を勉強していた事もあり、浦項サポーター側で試合を観たいと考え、浦項側のチケットを購入した。しかし、スタンドは仕切られていて、半分が浦項サポーター席、半分がレッズの家族席となっていて、隣のブロックへ移動は出来なくなっていた。また浦項のサポーターは5,6人しか来ていなかったの、そこへ入っていく勇気もなく、レッズの家族席で試合を観戦した。試合は、レッズの殆ど負け試合を何とか追いついたという試合だった。試合後に10人ほど浦項のユニフォームを着たサポーターを見かけた。どうやらサポーター席以外で彼らは観ていたようだった。私は、レッズをここまで苦しめてくれたクラブのサポーターに感謝を伝えたかったが、試合後は引率と言う事もあり、自由な行動が出来ず、叶わなかった。レベルの高い試合をするクラブのサポーターと交流がしたかった。

ACLという厳しい環境の中で、クラブや選手だけでなくサポーターに対しても辛らつなブーイングを受ける事がある。この5,6年で環境が変わり、例えば重慶でのアジア大会の様なブーイングを受ける事や、竹島の問題などの歴史的な問題もある。この様な環境の中で、ある意味心の傷を持った方がジャパニーズオンリーのような行動に出てしまう事は残念であるが、これはサッカーだけの問題ではないと思う。しかし、ACLの応援に行った事で、アジアの人達の民衆の風圧を感じる事が出来たとするならば、それは街の財産になりうると思う。良い部分を追求すると同時に、一方で厳しい見方をされることがあるという落差を実感できる。教育の場では、アクティブラーニングという言葉がよく用いられ、ある問題の前で個人がどの様な判断を下せるかというものである。それを先んじて経験できる貴重な場としてACLがあるのではないか。楽しい事だけではないが、そういった経験が出

来る事もサッカーの価値である。私は現在小学校4,5年生を指導していて、これから何らかのチャネルを通じてそういった事を伝えていきたい。ジャパニーズオンリーという表面的には非常に問題も多く、また無観客試合というペナルティーを科せられた事は残念であるが、今後の社会の財産にもなりうる部分もあるので、大人達がしっかりこの問題を考えていかなければならない。

### 「サッカーを文化に」の意味（笹木）

今回の山下さんの話は波乱万丈で非常に面白かった。私も新潟県長岡市出身で、68年生まれのため山下さんより6つほど年下になる。私も小中高と新潟の田舎でサッカーをしていた。当時の私を考えると、山内さんの様に高校卒業後ドイツへ飛び出していくという事は考えられなかった。

今回の講演のテーマは「サッカーを文化として日本に定着させる」ということであった。良く用いられる表現であるが、しっかり考えるといま一つ意味が分からないところがある。スポーツが日本で文化として受け入れられて久しいが、サッカーはそのスポーツのひとつの種概念である。すでに文化となっているものを文化として定着させるとはどういった意味であるか。おそらく、イングランドのサッカー文化を真似し定着させるという事ではないと思う。日本的なスタイル、サッカーのプレーやサポーターについてあると思うのだが、それを定着させていくという事だと思う。そう考えた時に、例えば野球はアメリカとは全く違う形で日本に文化として定着していると思う。日本のサッカーはプロになって浅いが、浅いなりにサッカーは文化として定着しつつあるのではないかと考える。良し悪しは分からないが、先の集団幻想の様な日本人的なメンタルもサッカー界に反映され始めている。そういった意味からこの言葉をもう一度吟味するのもいいのではないか。

### サッカーとナチズム（釜崎）

今年大阪にて、体育学学会という大きな学会がある。そこで「スポーツを文化として根付かせるにはどうしたらいいか」という題目でシンポジウムをする事になっている。そこで私に求められる事はドイツのサッカーの話をする事だ。文化として根付かせるという言葉には、ポジティブな要素が多いと思われるが、それだけではない。私の研究ではサッカーとナチズムの結びつきについてである。実際にシャルケは労働者階級のクラブとして多くのファンを獲得しているが、2006年にその労働者階級のクラブをナチズムに利用されていたとクラブが発表した。深く身に染みているものがあり、先の話出していた個人主義や寛容性と結びついている。山内さんの話の中であった車いすのお母さんを受け入れるエピソードや、ドイツでは目の見えない人のためのアナウンスがスタジアムで流れるようになっている。

私の友達でバイエルンの大ファンがいる。最近バイエルンは観客動員数が世界一となり、以前では手に入っていたチケットがなかなか手に入らなくなっている。そこで彼は周りの友人達を集めて、ファンクラブを作った。登録フェアアインとしてファンクラブが登録されると、優先的にチケットが手に入るからである。

（ここで会場中の携帯に地震速報が入り、中断。会場でも揺れを感じる。）

### 会場でのゴミ拾い（済木）

新婚旅行でアラブのサファリツアーに参加し、砂漠の真ん中で夕陽を見に行った。そこでひと組のドイツ人語夫婦がごみを拾っていた。ドイツ人にはそういった精神があるのかなと思った。

2006年ワールドカップの試合をライプチヒの会場で観戦した。日本のサポーターは会場のゴミ拾いをするという光景はよく見るが、この試合会場では、ドイツ人もコーラの空き容器などを拾っていた。この光景を見て感心していたが、後になって聞くとコーラの空き容器にはデポジットが付いていてお金になるという事だった。ドイツ人は偉いと思ったがそうではないのかと突っ込みたくなった。関西人なので最後にオチを付けてみました(笑)。

(山内)

皆さんの様々な意見が聞けて、私にとって本当に有意義な時間になった。ほんとうにありがとうございました。

(以上、終了。続きは延長戦にて・・・)